

## “胡耀邦”がいた時代 —『大地の子』と“日中蜜月”と天安門事件—

佐藤 祐介

### はじめに

今回、夏剛先生からお声をかけて頂き、このような機会を頂いた。いわゆる「論文」とは、学生の時、いや、学生の時さえも向き合ってきたとは到底言えず、このような場で、何を書けばよいのか、戸惑うばかりである。長年、追いつけてきたと言えるほどのテーマや専門性を持ち合わせていないものの、ここ数年、偶然の巡り合わせで、取材することになった「中国」のことであれば、少しは書くことができるかもしれない。それは、同時に、夏剛先生との出会いについて書くことであり、激動し続ける中国を考える上での「ある視点」となるかもしれない。そう信じて書き進められればと思う。

### 1、そもそもの始まりは、作家・山崎豊子さんへの“取材”

私が「中国」の取材を始めたのは、元を辿ると、ある訃報がきっかけだった。『白い巨塔』や『不毛地帯』など、壮大な人間ドラマを描いた長編小説を発表し続けた作家・山崎豊子さん（享年89）が亡くなられ、その作品世界、そして、彼女が世に問うたものとは何だったのかを探る番組を制作する機会を得たのだ。

実は、生前の山崎さんに、度々、取材を申し込んでいた先輩ディレクターがいた。しかし、長編小説以外、短編もエッセイも書かず、対談や講演にも応じない。自らを“作家馬鹿”と語るほど、執筆に賭けていた山崎さんが取材に応じることはなかったと聞いていた。亡くなったタイミングというのは、いかにも不謹慎だったが、番組制作の意図をご遺族でいらっしゃる山崎定樹氏、長年、作品作りを伴走してこられた秘書・野上孝子氏に伝えると、快くご理解頂くことができた。と言っても、山崎さんが亡くなられてすぐにご自宅に向かい、手紙を書き残し

て、関係者を口説き落としたのは、また別の先輩ディレクターである。こうして、初めて「山崎豊子さん」への取材が実現した。

生前の山崎さんにお会いすることが叶わなかった私たちは、山崎さんの作家人生 56 年間で紡がれた全 17 作品（作品数が少ないことが「長編小説を書き続けた日本で稀有な作家」としての存在感を高めているとも言われる）を改めて読み込むこと、そして、山崎さんが創作中に遺した膨大な資料、接点をもった方々に話を聞くことで、彼女が作品に込めた思いに迫れないか考えた。

山崎さんの創作の過程を知ることは、報道現場に身を置き、番組制作に携わるはしくれとして、どうあるべきかを突きつけられるものだった。担当編集者たちに「取材の鬼」と呼ばれ、恐れられていた山崎さんの膨大な取材。そして、「意見なきものは去れ」とまで語り、作品を面白くするために、周囲に意見を求め続けたという。語弊を恐れずに言えば、「売れるストーリーテリング」への渴望は、凄まじいものだった。当時の編集者であり、のちに文藝春秋・社長となる平尾隆弘氏によれば、「イメージーションと取材で得た事実との反復運動で現実を超えた物語を紡いでいく。それが山崎作品の真骨頂だった」。

自宅内にある書庫を見た時の衝撃は忘れることができない。「山崎先生は、いま書いている小説がすべて。過去の作品に興味がないので、ほとんどの資料は廃棄した」と秘書・野上氏から伺っていたものの、『白い巨塔』『不毛地帯』『二つの祖国』『沈まぬ太陽』などの礎となった膨大な資料、取材メモ、そして、取材現場で撮影された写真などが部屋一面にうずたかく積まれていたのだ。

ひときわ目を引いたのが取材時に録音されたカセットテープだった。その数、優に 500 本を超えていた。1 本 1 本のラベルに手書きで刻まれた人物の名前を見て驚き、さらに中身を聞いて引き込まれた。たとえば、『不毛地帯』の執筆時に取材した瀬島龍三。主人公のモデルとも言われ、陸軍大本営参謀だった人物で、戦後も中曽根内閣のブレインとして政財界に影響力を有した。取材は 100 時間に及んだというが、そのうち 12 時間余りの音声が残されていた。山崎さんが瀬島氏への取材を始めたのは 1973 年。当時、彼は大手総合商社の副社長を務めていた。

カセットテープには、瀬島氏が太平洋戦争初期の作戦の成功、商社が日本に確かな繁栄をもたらしているという自負を雄弁に語る一方で、大本営参謀として関わった戦争への自らの責任、「抑留者を労働力として提供した」と疑われてきたシベリア抑留については、深く語らない様子がまざまざと刻まれていた。それ以上に印象的だったのが、「合いの手」を入れながら、大胆な質問を次々とぶつけ、本音を引き出そうとする山崎さんの姿だった。

瀬島「太平洋戦争開戦の緻密な計画。これは僕が計画した」

山崎「15 万人の人（兵力）を動かす」

瀬島「その広大な太平洋を歯車のように回すんですからね。ふふふ。一国の運命が懸かるんですからね、民族の興廃がかかっていますからね」

山崎「もう一度、瀬島さんが何でも好きなものに生まれ変わってこいって言ったら、やっぱりもう一度、大本営作戦参謀におなりになるのでしょうか」

瀬島「うん、勝つ戦のね」

野上「どうして、おめおめ負けちゃったんですか？」

瀬島「それはまた別の話・・・」

（中略）

瀬島「僕ね、山崎さんね、割合過ぎたことはね、深刻に覚えてないんだな。シベリアあたりはね、そっとしておきたいという気持ちですよ。割に覚えていないんでね」

山崎「そこは自分が忘れたと思っているから」

（中略）

瀬島「50億円のプロジェクトをやるにしても、(戦争の作戦と)同じ事だとも思うんですよ。着眼をもうあくまで、大きくね。大局をつかんで、そして、その内容の組み方は、非常に緻密なんですね。日本の経済がこれだけ伸びたのはやっぱり商社でしょう、それは誰しもそう言う」

“昭和の参謀”とまで呼ばれた人物に対し、言葉は悪いが、臆することなく、ズケズケと踏み込んでいく、その執拗なまでの取材によって、自らの想像力を超える事実をつかみ、壮大なスケールの人間ドラマへと昇華させていく。山崎さんの創作活動の本質を見た気がした。

## 2、極秘テープ発見 ～遺された中国共産党総書記・胡耀邦の肉声～

山崎さんの自宅に通い始めて半年が過ぎた頃、膨大な取材テープの中に極めて貴重な記録が遺されていることが分かった。胡耀邦中国共産党総書記との3回に及ぶ会談の音声記録だ。『大地の子』の取材、執筆をしていたさなか、1984年から毎年1回、3年続けて中南海を訪れた時の様子が、合わせて4時間ほど録音されていたのだ。

正直に白状する。私は「胡耀邦」と聞いて、ピンと来たわけではなかった。自らの無知を恥じるばかりだが、実際、胡耀邦のことを、どれだけの日本人が知っているだろうか。胡耀邦の存在やその功績について、中国国内、そして、日本でも、ほとんど語られて来なかったのは事実ではないだろうか。取材を続けていくと、なぜ胡耀邦について、多くが語られて来なかったのかを思い知ることになるのだが、それは、もう少し先の話だ。

なぜ日本の一作家が、中国共産党総書記と会談することができたのか。しかも、中国政治の

“奥の院”とも言われる中南海で。胡耀邦がいた時代とは、一体、どんな時代だったのか。そして、胡耀邦は、総書記でありながら、中国、そして、日本で、なぜこれほどまで語られることが少ないのか。

このテープに遺された言葉、時代背景を探ることで、不安定な状態が続いている日中関係のあり方を今一度見直すことができるのではないかと思い、私は取材を始めることにした。

文化大革命が終わった1978年、鄧小平の指導体制のもと始まった改革開放政策。それを先頭に立って推し進めたのが胡耀邦だった。胡耀邦は、経済だけでなく、思想面でも開明的だった。政治体制改革にも積極的に取り組み、「自由」や「民主化」に寛容で、市井に生きる人々、とりわけ、若者たちへの理解があった。それゆえに、人民からの信頼も厚い指導者だったという。さらに、中国共産党のチベットへの政策の誤りを明確に批判するなど、少数民族への思いも強かった。

外交でも、開明的な視点は貫かれていた。「日中友好」を唱え、「両国の未来を作るのは若者たち」との考えから、日本青年3000人を中国に招待し、交流を積極的に行ったのだ。

胡耀邦が共産党トップに立っていた1980年代半ば、日本との関係は“蜜月”と呼ばれるほど良好だった。歴史教科書問題や、首相の靖国参拝問題など、今日に通じる歴史認識の問題が、度々、噴出していたにも関わらず、その度に、何らかの解決策を見いだそうとすることができた時代だった。胡耀邦が総書記にあった時代を知れば知るほど、いまでは、想像がつかないほどの“豊かさ”とも言える、中国の複雑な表情が浮かび上がってくるようだった。それは同時に、日本に対しても言えることなのであるが。

中国の残留孤児の物語をテーマとした『大地の子』の取材に取り組んでいた山崎さんは、社会科学院に籍を置きながら、中国全土への取材を進めていた。改革開放が進められていたとはいえ、冷戦まっただ中、共産圏・中国での取材の制約は多かったが、山崎さんは、戦時中の旧満州・中国東北部の農村、寧夏回族自治区の労働改造所など、海外の人物の立ち入りが禁じられていた場所への取材を次々と実現させていた。それを支えていたのが、胡耀邦だった。山崎さんは、面会の中で胡耀邦に直談判し、取材の許可を得ていたのだ。そして、この3回の会談すべてで、通訳を務めたのが、夏剛先生だった。

### 3、中南海でも変わらぬ“山崎節” 心を通わせる2人

1984年11月、翌年12月に行われた2回の会談については、山崎さんが遺した取材記や、当時、駐中国大使だった中江要介氏の著書などでも、すでに言及されているため、詳細はそちらに譲りたいと思うが、2人のやりとりを振り返りながら、実際の音声から感じられたこと、取材を通して明らかになったことをできる限り、記してみようと思う。

音声には、それまでの作品の取材と同様、山崎さんの“らしさ”が前面に出たやりとりが遺されていた。そして、2人が立場を越えて、心を通じ合わせている様子が刻まれていた。通訳を務めた夏剛先生曰く、「会談前の山崎先生は、いつになく緊張していた」とのことだったが、最初の会談から初対面とは思えないほど、打ち解けている様子がうかがえる。こんなやりとりが交わされていた。

山崎「私は中国を愛しています。もし中国の悪い面を書いても、愛すればこそその愛の鞭だと思って下さい」

胡耀邦「うんうん、いいですね、賛成です。間違いを克服しながら、後から前進する。これが中国です」

山崎「中国の素晴らしい魅力ある男性のために乾杯」

胡耀邦「山崎さん、ここに、生の魚があります。サシミ、サシミ」

山崎「謝謝」

山崎「胡耀邦総書記なんて難しい肩書ではなく、私のボーイフレンドだと思っていいですか？」

胡耀邦「山崎さんは、高嶺の花ですからね」

さらに、印象的だったのは、胡耀邦が「愛国主義」という言葉を持ち出し、日中関係について言及していたことだった。それは、他愛もない映画についての話題の中で触れられていた。

胡耀邦「私は20年前、日本の映画を2本みました。1つは『山本五十六』で、もう1つは、『あゝ海軍』。私は『山本五十六』は良かったと思っています。ストーリーは真実でした」

山崎「いや、その今の胡先生のお言葉で『山本五十六』をみて、拒否しないで真実を描いているという言葉には、非常に柔軟な頭と寛容な精神を感じますね」

胡耀邦「しかし、この映画を中国国内で公開することは賛成しませんよ」

山崎「どうしてですか？」

胡耀邦「山本五十六の愛国主義は極めて狭い」

山崎「どういう点が狭いと思われましたか」

胡耀邦「戦時中は、私たち中国人民の利益と東南アジアの人々の利益を考えなかったからです。それは狭すぎる愛国主義ですから」

愛国主義。山崎さんが胡耀邦との会談を続けていた頃は、先にも述べた通り、現在に連なる“歴史認識”の問題で、日中関係が大きく揺らいだ時期でもあった。“愛国主義”をどう捉える

べきなのか、日中両国に問われていたのだ。そんな中、山崎さんと胡耀邦との会談が、外交上、重要なメッセージが発せられる場となった瞬間があった。それは、1985年12月に行われた2回目の会談でのことだった。

#### 4、“靖国参拝”“A級戦犯分祀” 日中外交を左右させた2回目の会談

1985年12月7日。中南海・勤政殿。胡耀邦は自らこう切り出していた。

胡耀邦「今度会ったら、総理に今日の話も伝えて下さいね。靖国神社参拝の問題については、私はもうそれほど話題に出さなくてもよいのではないかと思います。双方とももう話題にしないほうがいいでしょう」

胡耀邦が呼びかけた相手は、去年11月、101歳で亡くなった中曽根康弘だった。当時、日本の首相の座にあった中曽根は、憲法改正を持論とし、防衛力の強化を打ち出すなど、歴代の総理大臣の中でも保守的な色彩が濃い政治家だった。この会談が行われた4ヶ月前の8月15日、戦後40年にあたる、この日に、中曽根は、総理大臣として初めて靖国神社に公式参拝していた。

中曽根は、事前に中国側にも靖国参拝を通知し、地ならしを図っていたというものの、中国共産党の中で、激しい日本批判が噴出した。

取材を進めると、中曽根の靖国参拝の1ヶ月後、中曽根外交を支えた伊東正義衆議院議員が訪中し、胡耀邦との会談の中で、「日本は、日中共同声明の中で、『戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する』との立場を表明したが、この基礎の上に、謙虚な態度で日中友好関係を発展させて行きたい」と、日中関係における日本の考え方を水面下で伝えていたことが分かった。

しかし、胡耀邦と伊東の会談のわずか5日後、数千人規模の学生による反日デモが、首都北京で発生し、「日本の軍国主義復活 反対」「中曽根打倒」などと叫んだデモは、天安門広場にまで及んでいた。日本との関係を重視した“親日派”胡耀邦の立場を揺るがしかねない事態が起きていたのだ。

国交正常化以来、日中関係が最大の試練にさらされていた、まさに、その瞬間に、胡耀邦は、山崎さんとの2回目の会談に応じていた。この時は、中国駐在の中江要介大使も同席していた。

胡耀邦「また靖国神社を参拝してしまうと、揉め事がさらに大きくなるでしょう。また参拝したら、私たち中国の指導者は、日本に友好的な態度を表明しづらくなります。靖国神社参拝の問題については、私はもうそれほど話題に出さなくてもよいのではないかと思

います。双方とももう話題にしないほうがいいでしょう」

中江「今言われたように、『中国は言わない』と。言わないということは、（日本では）もういいんだと思ってしまう人がいるんで、それでまた（参拝の）議論が出るんです」

山崎「もう何も言わないということは終わったと思って、また靖国神社に出かけていきます」

胡耀邦「これは中国国内では、とても、とても難しい、難題なんです」

そして、胡耀邦は、個人の見解と断った上で、踏み込んだ考えを示していた。

胡耀邦「私個人の見解ですが、戦犯を外せば、問題がなくなりますよ」

山崎「A級だけですか？BC（級）までですか」

胡耀邦「全員です、全員。せめて甲（A）を外したら世間の見方は大きく変わるでしょう」

会談に同席した中江大使は、「A級戦犯が祀られる場所に、日本の総理が公式参拝することが問題」であり、「A級戦犯を分祀することで、靖国に対する見方が大きく変わる」と中曽根に、胡耀邦の見解を伝え、さらに、「再び参拝があると胡耀邦の立場が極めて難しくなる」とも付け加えていた。

さらに、この会談の中で、胡耀邦は、自らが抱く日中戦争についての認識をも披瀝していた。それは、胡耀邦自身がもつ歴史観を知る以上に、歴史認識の問題と、日中両国がどう向き合っていくべきなのかを指し示すかのような言葉だった。

「歴史上の感情が完全になくなることは、たぶん不可能でしょう。でも、その感情を徐々に薄くしていくことは可能です。例えば、第2次世界大戦が終わって40年が過ぎましたが中国の全ての人民に第2次世界大戦のことを忘れさせるのは恐らく無理でしょう。しかし1900年の義和団の乱で8か国と戦った中国人の記憶は既に薄れています。1900年から今年まで85年が経ちます。ですから1930年代から40年代までに中日両国に起こった問題はあと40年経ったら薄くなっていくのだろうと思います」

翌年8月15日。中曽根は「高度の政治的決断」として、公式参拝を行わないという決断を下した。山崎さんとの会談での、胡耀邦の中曽根に向けた発言が、結果的に、日中外交、そして日中両国の関係を動かすことになったのだ。

胡耀邦と幾度となく首脳会談を行い、個人的なつながりを深めていた中曽根は、当時を振り返り、生前、NHKのインタビューにこのように答えている。

「遺族の方々は、自分たちの親族が靖国神社に眠っているんだと、国家を代表する総理大臣が国家を代表して頭を下げてくれと、そういう願いを持っておったと思うんです。公式に行って正式に国家として英霊に対してお礼も言い、慰めてくると、そういう仕事をやる必要があると、そういう信念を持っておりましたから。相手の中曽根が靖国神社に公式参拝をまあ堂々とやってしまった、そういう意味において友人である胡耀邦の立場が、中国の国内においてちょっとまずくなると。相手の国情、国民感情、あるいは政治的状況の判断、そういうものは日本の総理大臣やら政治家としては非常に重要なものがある。それについては、現地の情勢、あるいは日本から直接使いを出して現地の情勢やら反応を確かめておく。日本の総理大臣の行動というものが惑わないように、また、間違わないように、ちゃんとした反省と自覚を持ってやっておると。(A級戦犯分祀は)発想としてはあったが、実行することは、とても難しい問題であった。ですから、分祀論ということも言ったことはありますけどね、実行する段階にはとても行けなかった」

しかし、日本側が思っていた以上に、胡耀邦が厳しい立場に立たされていたことが明らかになるのは、もう少し時間が経ってからだった。

##### 5、“誤国主義”に陥るなかれ ～日中両国の“いま”を見抜いていた胡耀邦の“遺言”～

最後となった3回目の会談が行われたのは、1986年10月23日。この会談は、それまでとは様子が違っていた。この内容は、山崎さんによって「取材記」として発表されることもなく、私が取材した当時、ほぼ未公開の内容だった。

この時は、引き続き支援を依頼する山崎さんに対して、胡耀邦は力のない言葉で応じているかのように感じられたのだ。

山崎「多くの日本国民は、中日友好の小説を望んでおります。このことは、中日の合作、外交にも勝るとも劣らない意義のあることとご理解頂き、小説は、まだまだこれから3年か4年かかりますが、その間にも私が書けなくなって挫折しそうになったら総書記、会って私に力づけてください」

胡耀邦「私が4年後にいるかどうかわかりません。3年後にいるかどうか・・・もっと多くの人を訪ねてください。より若い人と友達になってください」

山崎「いま、総書記は、3、4年したら、私はいなくなるとおっしゃいましたが、それはだめです。日本の国民は、あなたのような指導者にすっかりファンになっていますから、最低5年、最低5年は頑張らねばなりません」



“胡耀邦”がいた時代（佐藤）

胡耀邦「外国の作家で、3回も会見したのは、あなただけです。大作の成功をお祈りして  
います。難産はいけない。順調に『大地の子』が生まれますように」  
山崎「謝謝、再見、再見」

通訳を務めていた夏剛先生は、それまでの2回の会談とは全く異なる胡耀邦の様子を記憶していた。

「胡総書記は1回目と2回目は和やかに談笑し、大国の指導者の気品があったのですが、この時は、終始、あまり笑わず、イライラしていたような気がします。無表情で落ち込んでいました」

そして、会談の終了が近づいた、その時、山崎さんの言葉を遮るように、胡耀邦は、日中両国にとって、“火種”となり続けていた“愛国主義”に対する、ある言葉を用いながら、自らの思いを語り始めた。

「日本人が愛国主義だけを提唱し、日中友好を提唱しないなら、このような愛国主義は不健全だと私は考えます。国を誤るという『誤国思想』『誤国主義』です。みなさんには『誤国主義』を防いでほしいと思います。中国の場合も、中日友好を重んじない愛国主義は不健全です。我々が開放政策を実行しなければ、日本人と長期的友好的に付き合うことを重んじなければ、世界の人々、世界各国と長期的友好的に付き合っていくことを重んじなければ、国の進路を誤ることになってしまいます。私たちも『誤国主義』を防がなければならぬのです。愛国心の行きすぎを日本も中国も防がなければなりません」

胡耀邦は、山崎さんとの会談の3ヶ月後、突如、総書記の座を追われることになった。解任の理由は、複数伝えられているが、日本の青年3000人を招くなど外交姿勢が独断的だったというのが、理由のひとつとされた。

3回に及んだ山崎さんと胡耀邦の会談。胡耀邦が語った内容は、今を生きる私たちにとって、多くの示唆に富んでいると感じずにはいられなかった。残念ながら、胡耀邦が望まなかった未来を、いま、私たちは歩いているのではないだろうか。

靖国参拜の問題の渦中に開かれた2回目の会談は、行き過ぎた改革に歯止めをかけようと、中国共産党中枢で、保守派が巻き返しを図ろうとする動きが顕在化しつつある時期でもあった。そのため、山崎さんとの会談の中で語られた胡耀邦の発言は、当時、自らが置かれた苦しい政治的立場と密接に絡んだものだったことは、容易に想像がつく。中江大使の証言によれば、「靖

国参拝の問題が契機となって日中関係を非友好的なものにするようなデモや暴動が大きくなれば、日中関係を発展させようとしている自分を含めた日中両国の指導者の足を引っ張ることになることへの懸念の表明だった」という。それはすなわち、靖国参拝など歴史認識の問題で日中両国が偏狭な愛国主義、すなわち、“誤国主義”に任せて、騒げば騒ぐほど、日中関係の構築が困難なものとなり、結局、両国にとってプラスにはならない。「寝た子を起こしてはならない」ということを伝えたかったのではないか。それは、「歴史上の感情は、なくなりはないが、時間が薄めてくれる」と信じていた胡耀邦の言葉とも重なる。

しかし、残念ながら胡耀邦の懸念は、2000年以降、悪化を辿った日中関係の状況を不幸にも言い当てることになった。

1990年代の江沢民体制以降、愛国主義教育による中国の偏狭なナショナリズムの高まりや、地域秩序を不安定化させるほどの軍事力の増強や中国軍の動向、そして、昨今の日本国内における歴史修正主義的な見解の跋扈は、残念ながら、すべて、胡耀邦が懸念していたことと通ずる。それゆえに、胡耀邦が遺した言葉は、今まさに最も見直されるべきではないかと思えるのだ。

それと同時に、私たち日本にとって、親日政策を進めた胡耀邦の失脚が、その後の歴代中国指導者が対日政策を遂行する上での深刻な軛となっていることを自覚しなければならないだろう。

その意味で、靖国神社への公式参拝を強行した中曽根は、胡耀邦との間に築いた関係に甘え、結果的に盟友を窮地に追い込み、日中関係発展への一つの芽を摘んでしまったことは、否定できない。また、小泉純一郎が総理大臣在任時に靖国神社への参拝を繰り返したことも、胡錦濤一温家宝体制が、対日関係修復に踏み込むことを阻害した点も否めないと思えるのだ。

## 6、天安門事件の引き金となった胡耀邦 未だかなわない再評価

ここまで、山崎さんとの会談の中で胡耀邦が語った言葉を辿り、それらがもつ今日性について書き進めてきたが、その後の胡耀邦の運命にも触れなくてはならないだろう。それは、すなわち、なぜ胡耀邦が公で語られることがなく、今日にいたっているのかを知ることであり、同時に、いまの中国を形作った原点を知ることにもつながると思うからだ。

突然の失脚から2年経った1989年4月。胡耀邦は、会議中に倒れ、帰らぬ人となった。その死を悼み、学生や労働者たちが天安門広場を埋め尽くし、それが次第に民主化要求のデモへと発展し、6月4日の天安門事件を引き起こすことになった。多くの学生や市民、戒厳部隊の軍人が犠牲になったとされてきたが、その真相は、いまだ明らかになっていない。

「天安門事件については解決済み」とする中国当局は、これまで、事件についての言及は避  
206 (792)

けており、いまでも、事件を連想させる言葉、たとえば「六四」などは、中国国内のインターネットでは検索できない。NHKの放送も、事件を扱ったものは、画面が黒くなり、放送されることはない。

そして、その死が事件の引き金となった胡耀邦については、長らく、公で語られることはなかった。生誕100年を迎えた2015年11月、習近平国家主席以下、最高指導部が参加する形で記念行事が行われ、その席で、習近平は、胡耀邦の「公正清廉で自らを律する崇高な態度」を強調。クリーンなイメージが強い胡耀邦の評価を、就任以来、「反腐敗運動」を展開してきた指導部への求心力に取り込む形で、一定の再評価を行った。しかし、民主化運動や天安門事件と胡耀邦の関わりについては、言及されることはなかった。それは、2020年になったいまも、変わることはない。

## 7、胡耀邦を失い、中国の改革は終わった ～中国共産党最長老の証言～

胡耀邦の死、そして、その後に起きた天安門事件は、中国、そして、世界にとって、どのような意味を持つのか。私は、日本の研究者の助けを借りて、ある人物に接触することができた。その人物の名は、李銳（享年101）。昨年2月、この世を去った。

李銳は、1958年に毛沢東の秘書を務めたことで知られ、その後、毛が主導した「大躍進運動」を批判して党籍を剥奪、1966年から始まった文化大革命では8年間投獄された。その後、名誉回復され、党組織部副部長として、後に党のトップになる胡錦涛や習近平など若手幹部の登用を決め、改革派の総書記、胡耀邦らを支えた。

一貫して民主化を訴えた李銳は、天安門事件でも武力弾圧に最後まで反対し、晩年も「言論の自由」「人権の尊重」「政治体制改革」を訴えるなど、国内への締め付けを強める習近平政権への批判を展開。“最後の体制内改革派”と呼ばれた人物だった。

李銳は、胡耀邦が失脚した後も、度々、彼のもとを訪れるなど、晩年の胡耀邦を最もよく知る人物の1人だった。胡耀邦が亡くなる10日前にも、直接会って話をしていた。

李銳への取材は、当局からの監視の目もあり、厳しく制限されてきたが、亡くなる2年前、合わせて5時間のインタビューを行うことができた。

李銳は、天安門事件の際、最も激しい銃撃が行われ、多くの死傷者が出たとされる北京市内の木樨地にほど近い場所で暮らしていた。李銳本人にこちらの趣旨を伝えると「胡耀邦のためならば」と、快く応じてくれた。問わず語りの形でインタビューは進んだ。100歳の誕生日を目前に控えてもなお、記憶、思考は鮮明で、部屋中に響き渡る声で率直に語ってくれた。李銳の口から語られる言葉は、胡耀邦の存在の意味を改めて気づかせてくれるとともに、“中国の現在地”を知る上でも、重要な直言だった。

「胡耀邦の統治によって、改革開放を10年先に進められたことで、中国は、本当に普通の世界への道を歩き始めたのです。胡耀邦は話していました。『誰かを盲目的に信じるのではなく独立した思考であるべきだ。党、組織、国家は、みな正常化、民主化、法治化すべきである。1人の人間の言ったことがすべてということに反対しなければならない』と。現在、胡耀邦が亡くなり起きた『六四（天安門事件）』後に、中国は再び以前の体制に戻ったと言っていいでしょう。要するに鄧小平の言う、『毛沢東がいれば毛沢東のいうことがすべて。私がいれば、私がいうことがすべて』であり、現在なら、要するに『習近平のいうことがすべて』なのです。すっかり過去に戻ってしまったのです。胡耀邦の死こそが改革開放の分水嶺となったのです。胡耀邦は専制に反対し、個人崇拜に反対していましたが、今に至っても、それは解決していません。再び過去の、あの感じに戻りました。権力は腐敗する。絶対的権力は徹底的に腐敗する。毛沢東がどれだけひどかったかわかるでしょう。中国という社会そのものが、毛沢東を生んだのです。今もって、一人の人間を核心としなければならぬのです」

終わりに ～胡耀邦がいた時代から30年 中国はどこへ向かうのか～

天安門事件後、中国は民主化を封じ込め、経済発展にひた走ってきた。一方、欧米諸国、そして、日本は、「経済の自由化が進めば、いずれは民主化が進むであろう」との見方に立ち、事件後の中国の孤立を防ぐ形で動いた。その裏には、中国がもつ経済的潜在力を各国が期待していたことは言うまでもない。

胡耀邦の死、そして、天安門事件から30年。こうした思惑は外れ、いまだ、中国共産党の一元体制は続き、その強権的な統治は、より一層、強まるばかりだ。香港のデモに対する当局の強硬な姿勢、ネット空間に張り巡らされる監視の目、言論の自由の制限、少数民族への強硬な政策など、様々な問題が指摘されている。

そんな中、2020年のはじめから猛威をふるっている「新型コロナウイルス」。発生当初の対応の遅れが、これまで燻ってきた国内の問題に火をつけるのではないか、との見方も出始めている。

一方、日中関係に目を向けてみると、米中貿易摩擦の影響もある中で、良好な関係を維持しているとされている。ただ1980年代に噴出した歴史認識をめぐる問題は、完全に解決したとは言えないだろう。いやむしろ、胡耀邦が警戒していた偏狭なナショナリズム、“誤国主義”は、日本にこそ、広がっているようにも思えてくる。今後も、米中関係や世界の情勢、日中両国のいずれかの体制の変化によって、また、同じような問題がいつぶり返しても、おかしくはない。

胡耀邦は、戦後日本の平和的発展を高く評価し、日本の要人、経済人、そして、山崎豊子さ  
208 (794)

んのような文化人に至るまで積極的に会い、日本に対する親近感を隠すことはなかった。また、胡耀邦は、時の総理大臣、中曽根康弘との密接な人間関係を築き、日中両国間の青年交流を積極的に進め、21世紀の社会を担う青年たちが、日中友好の重要性に関して認識を深めることの重要性を強く認識していた。

さらに、胡耀邦が健在だった時は、最高指導者の鄧小平も含め、中国は米ソ両超大国との関係を巧みに調整する一方で、それとは、別の次元で、日中関係の発展を根源的に重視していたように思えてならない。さらに、ここでも書いてきたように、胡耀邦は、教科書問題や靖国参拝を巡る問題を念頭に、日本のナショナリズムの台頭に懸念を表明する一方で、中国自身の偏狭なナショナリズム“誤国主義”が台頭することに、とても警戒していた。自国の立場に一方的に囚われない広い視野を持った指導者は、いま、世界中、どこを見渡してもいない。

ここ数年、中国に関する取材を続けてきて思うことがある。胡耀邦が失脚せず、中国を率いていたら、いまのような中国とは、別の、“もう一つの中国”の形、そして、もう一つの世界の形があったのではないか。そんなことは、誰にも分からないことだが、自国の利益ばかりを考える今の世界とは、また違った世界が広がっていたのではなかろうかと思いたくもなる。そんなことを想像させてくれる可能性が、“胡耀邦がいた時代”には、あったのではないか。そんな気がしてならない。ちょっと甘すぎるかもしれないが……。

### 【主な参考文献・資料・番組】

山崎豊子 全作品

山崎豊子「『大地の子』と私」（文藝春秋、1999年）

野上孝子「山崎豊子先生の素顔」（文藝春秋、2015年）

新潮文庫編集部／編「山崎豊子読本」（新潮社、2018年）

中江要介「アジア外交 動と静 元中国大使 中江要介オーラルヒストリー」（2010年）

清水美和「中国はなぜ「反日」になったか」（文藝春秋、2003年）

高原明生／服部龍二編『日中関係史 1972-2012』（東京大学出版会、2012年）

李銳／小島晋治〔翻訳〕「中国民主改革派の主張」（岩波書店、2013年）

及川淳子「現代中国の言論空間と政治文化」（御茶の水書店、2012年）

楊中美「胡耀邦 [ある中国指導者の生と死]」（蒼蒼社、1989年）

阮銘「鄧小平帝国の末日」（三一書房、1992年）

エズラ・F・ヴォーゲル「現代中国の父 鄧小平 上・下」（日本経済新聞出版社、2013年）

バオ・ブー／ルネー・チアン／アディ・イグナシアス「趙紫陽 極秘回想録 天安門事件『大弾圧』の舞台裏！」（光文社、2010年）

2013年11月19日 クローズアップ現代「小説に命を刻んだ ～作家・山崎豊子～」

2015年9月27日 NHKスペシャル「作家・山崎豊子 ～人間と戦争を見つめて～」

2017年9月23日 NHKスペシャル「総書記・遺された声 ～日中国交45年目の秘史～」

立命館国際研究 32-4, March 2020

2017年11月26日 目撃! にっぽん「そして名作は生まれた ～『大地の子』誕生秘話～」

2019年6月9日 NHKスペシャル「天安門事件 ～運命を決めた50日～」

2019年12月21日 BS1スペシャル「証言ドキュメント 天安門事件30年」

(佐藤 祐介, NHK 報道局社会番組部ディレクター)